氏　　名	JEONG Yeon Kyung（ｼﾞｮﾝ ﾖﾝｷﾞｮﾝ）
学位の種類	博　士（芸　術）
学位記番号	甲第22号
学位授与日	平成21年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	**作り手の心理と芸術**
審査委員	主査　教　　授　　島　尾　　新
	副査　教　　授　　諸　川　春　樹
	副査　教　　授　　伊　藤　　孚
	副査　教　　授　　伊集院　清　一
	副査　東京国立近代美術館 工芸課長　　金　子　賢　治

内　容　の　要　旨

私は留学生として10年以上日本に滞在している。20代の10年間を日本の文化に染まりながら過ごしたことで、韓国で形成された性格や思想などに大きく変化が起こった。韓国人らしい私が、一瞬にして消え去ったり現れたりする。留学生活を通して、韓国と日本の文化をそれぞれ吸収し融合する術を学んできたからかも知れない。そこで、異文化から生まれる意見の摩擦やお互いの偏見、言葉の誤解、すれ違いなどからズレが生じることを、人間の心理の変化に置き換えて考えることになった。そこから心理学というものに興味を持ちながら、変化していく自己を対象にして論文を進めている。

Ⅰ章では人間の心理に興味を持って、自分の思考として展開するまでの経緯について述べている。ルノワールをきっかけに、主観的過ぎる私の制作は、作り手としての心持ちや姿勢、哲学などを学び、芸術に目覚めていく過程が書かれている。そして、なぜそこまでルノワールにこだわるのかについての理由も明らかにしている。作品には制作者の苦労が滲み出てはならない。作品を見る鑑賞者に、ひと時でも現実から逃れられる時間を提供し、幸せという感覚でなくても、何かしらそれに結び付けられる感覚をもってほしいというのが私の願望である。ルノワールもまた、人生には不愉快なことがたくさんあるため、作り手は不愉快なものを作る必要がないと言っていた。それは、作り手の心持ちが、自然と作品に現れるからである。本当にそうであるのか、作り手である私が過去を振り返りながら検証していくことで確認することができるよ

うに思った。そして、ちょうど気持ちの変化や自他との関係について考えていた時期でもあったので、自然と心理学に興味を持つようになった。

Ⅱ章では芸術学心理学を用いて自作品の分析を試みた。 といっても、色彩の刺激からルノワールに繋がっていたので、色彩心理学に限定して研究を進めようと思っていたが、芸術心理学と出会ったことで、芸術心理学を自己の解析のツールとして用いることにした。芸術心理学には言葉の響きからも自分の世界に近いものを感じていた。さらにその療法を理解することで距離はもっと縮まったように思う。本論では療法を取り上げ、作品に投影されている過去の自分の心の動きを読み取ってみたところ、私の根底に内在したものが作品に流れ出ていることに気がついた。そして 作品制作というものが作り手に自己治癒力を与え次の制作へと導く力を持っていることと、幸せと結び付かないように見える作品でも隠れた部分に幸せと結び付けられる要素を秘めていることが分かった。

Ⅲ章ではⅡ章の最後で注目した「なぐり描き法」とドローイングの関係を明らかにしている。ドローイングは作品制作において今や必要不可欠となっているのだが、それについて過去と現在のドローイングを比較して述べている。ドローイングは作品制作開始から途中経過、仕上げなどすべての工程と結ばれている。私のドローイングは墨汁でしか行わないため、アイディアが多種多様に展開する幅を持っており、また立体に起こしたいという衝動を喚起させてくれる重要な要素にもなっているのである。そして、墨汁でしか行われていないドローイングの黒色について、もう一度ルノワールに回帰することで自己分析を深めていく。

Ⅳ章では前章までは心と結びつけて作品を分析してきたベースになる、制作における素材や形について、私自身の見解を述べている。作品の形を一貫して平面と立体で分けて話を進めるために、平面や立体といった形の定義を確認することから始めている。その上で、なぜガラスという素材が必要なのかを考え、そこからさらに、工芸という芸術はいかなるものか考えてみた。

全体としては芸術心理学を用いて作品を解析していくことで、作り手の状況や環境から心が形成され心の根底に内在したものが、作品に流れ出ていることを発見している。そして、心の投影以外に「作品制作」という行為が、自己治癒力を持って次の制作にもつなげられる原動力であるのではないかと考え始めた。作品制作は作り手が自己治癒力を持つことで、作り手は自我を保つ。そして、作品には作り手の心が投影されているため、鑑賞者にも作り手の心が伝わるのだと思う。心が 伝わることは鑑賞者を刺激することになるため、鑑賞者にも何らかの心の変化が表れ、作品から刺激を受けることになる。このように、自己啓発で自分を知ることで、他者のことも知り、自他の関係を、作品を持って説明している。そして、他者への刺激物でもある作品を見て、鑑賞者に感情の変化が起きれば、必ず幸せという感覚ではなくても、鑑賞者を刺

激することができる。そこにこそ作品の存在意義がある。そのためにも、作り手自身が制作を楽しみながら、鑑賞者に刺激を与えられる作品を制作し続けていくことが、これからの私に与えられた課題だと思う。